震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013 年 04 月 26 日

(C)河北新報社

津波で5キロ内陸に打ち上げられた発電船。現在は視察員や観光客のために公園として整備されている＝バンダアチェ（写真部・佐々木浩明撮影）

教訓伝える船・モスク

【バンダアチェ（インドネシア）高橋鉄男＝報道部】2004年のスマトラ沖地震で甚大な被害を受けたアチェ州では、津波の記憶を風化させないため、行政や住民が震災の伝承に取り組んでいる。州都バンダアチェ市には、建物や漁船など「災害遺構」が数多く残され、スマトラ島周辺の島では、教訓を歌にのせる活動が行われている。

（３面に関連記事）

むすび塾@バンダアチェ

災害遺構 市内に多数

アチェ州では一部地域を除いて、かつて津波の教訓がほとんど語り継がれなかったという。死者・行方不明者が16万人以上に上るスマトラ沖地震を機に、地域では被災建物を残す機運が高まった。

市が災害遺構として保存しているのは、漁船が屋根の上に乗ったままの住宅、海から5キロ内陸まで打ち上げられた発電船（2600トン）と被災住宅。いずれも国内外から大勢の人々が訪れる。

また住民が自主的に遺構を残しているケースも目立つ。集落に残る被災住宅や被災モスク、被災車両などだ。

河北新報社の巡回ワークショップ「むすび塾」のメンバーとして現地を視察した減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は「スマトラ沖地震では津波の意識が薄く、多くの犠牲者が出た。行政、住民ともに遺構という教訓を残し、子孫に同じつらい思いをさせないという強い気持ちの現れだろう」とみる。

スマトラ沖地震で、約120人が犠牲になったニアス島では震災後、伝統舞踊「マナエ」に津波防災の歌詞を付けて、備えを促す試みが始まった。

一行に同行し、現地の取り組みに詳しい立教大アジア地域研究所の高藤洋子特任研究員は「伝え続けるには、日常生活に溶け込ませることが大事だ」と話した。